

【教育実践報告】

玉川大学の農学部在学中に挑戦した6つの海外プログラム

眞木 凌・小原廣幸

はじめに

玉川大学農学部では、地球環境やエネルギー、食料問題といった国際的な視点でとらえるべき課題を教育と研究の一つの柱に据えている。生物環境システム学科では、2年次に約4か月間の海外プログラムを行いグローバル社会に向けての実践的な学修を行っている。本稿では、そのような課題に学生として主体的かつ積極的に取り組んできた第一著者（眞木）の体験を中心にその実践報告を行いたい。

眞木は、将来の仕事として発展途上国農村部の農家を対象とした農業面での国際協力を考えており、大学在学中に経験を積み、卒業後に即戦力のある人材となるべく準備を進めてきたが、その夢の実現につながるものとして、以下の数々の海外プログラムに参加した。

1. 生物環境システム学科海外研修：カナダ留学

2016年3月31日から2016年7月9日まで、約3か月の日程で農学部生物環境システム学科2年次の海外研修に参加した。カナダのバンクーバー・アイランド大学を主な拠点とし、科学英語表現やEnglish Communicationなどの英語科目と同時に、植物分類学や植物繁殖学など専門性の高い科目を受講した。加えてカナダの大自然を体



フィールドトリップで見たカナダの大自然



授業：English Communicationでの発表

感じ、現地の植物や自然環境を考察するフィールドトリップがあった。

カナダ留学中の生活を通じて海外に対する抵抗がなくなったと同時に、海外に対する興味が生まれたことがきっかけで、他の海外のプログラムにも参加しようという気持ちが芽生えた。また、英語しか通じず、慣れない環境の中でも能動的に動くことの大切さを学んだ。

2. 海外ビジネス武者修行プログラム

カナダ留学で培った英語力をアウトプットする場が欲しかったため、大学2年次の夏季休暇を利用し、2016年8月7日から2016年8月21日まで、約2週間の日程で、株式会社旅武者主催の「海外ビジネス武者修行プログラム」に参加した。ベトナムで開催されたこのプログラムは、国際競争力のある人材の育成を目的に実施されたものであった。日本の大学生でチームを組み、新規ビジネス担当者として、新しい商品・サービスなどを開発し、実際に店舗で売り込みを行った。

私のチームはレストランの新商品開発部門に携わり、ベトナム文化と日本文化を組み合わせた冷やし中華風フォーを開発、審査の結果、優勝チームとなった。自身の弱みは他のメンバーに補ってもらい、強みは活かしてメンバーを牽引するという、チーム内で個々の強みを発



参加したメンバーとの集合写真



休み時間に菜園の様子をみる子供達



チーム毎に企画を練っている様子



菜園のペットボトル栽培



チームで新たに開発した商品（冷やし中華風フォー）



野菜の間引き

揮し、チームとしてパフォーマンスを上げることを学んだ。

3. カンボジア・バイヨン中学校での菜園指導

発展途上国農村部の現状を自分の目で確かめたいというのがきっかけで、農学部石川晃士准教授の紹介を通じ、カンボジアでのインターン活動を行った。大学2年次の

春季休暇を利用し、2017年3月17日から2017年3月21日までの約5日間、カンボジアのシェムリアップ州にあるバイヨン中学校で菜園指導を行った。ここではNGO団体「Joint Support Team for Angkor Community Development (JST)」の支援により学校菜園が行われていた。

私は、学校菜園の現状把握、生徒や職員への農業知識や農業技術の指導を行った。生徒や職員への聞き取り調

査を通して、学校菜園の改善点を明らかにし、現地の人々の意見を受け入れつつ、現地のペースに合わせて少しずつ改善していくことの大切さを学んだ。

4. ユーラシアユースサミット

友人の紹介で、大学3年次のゴールデンウィークを利用し、2017年5月1日から2017年5月8日まで、約1週間の日程で一般社団法人全国学生連携機構（JASCA）主催の「ユーラシアユースサミット（EurAsia Youth Summit）」に参加した。このプログラムは、ベラルーシ共和国で開催され、人々の暮らしに最も身近で不可欠な「食」「エネルギー」「健康・医療」をテーマに、互いの国の現状共有を目的としたものであった。

私は食の代表として本プログラムに参加、日本の農業の歩みや今後の課題についてプレゼンテーションを行った。2国間での協力を見据え、学生間でできることは何かを議論した。また、日本とベラルーシは原子力発電の影響を受けた国であるため、今後の安全保障に関する意

見も共有した。文化や価値観が異なる国でも自国にかけられる思いは自分と変わらないことを実感することができた。

5. 国際学生リーダーシップシンポジウム

玉川大学国際教育センターの紹介で、大学3年次の夏季休暇を利用し、2017年8月1日から2017年8月7日まで約1週間の日程で、タイで開催された国際連合主催の「国際学生リーダーシップシンポジウム（University Scholars Leadership Symposium）」に参加した。このプログラムは、約80か国の約1000人の大学生が集まり、世界の環境問題や貧困問題についての講演を聞くことが主な内容であった。また、孤児院の子供達と直接関わる機会や、貧しい人々へ食料を配布する機会を得た。

難民を経験した参加者と話す機会もあり、普段会うことができない国の人々の考え方や思いを聞くことができたことは非常に有意義であった。



ベラルーシ学生と日本学生による
農業の現状についての議論



中国とタイからの参加者との集合写真



日本の農業の現状を発表



国連職員による貧困問題についての
パネルディスカッション



タイ滞在中に訪問した孤児院

6. アメリカ国務省スカラシッププログラム

玉川大学国際教育センターの紹介で、大学4年次に2018年6月27日から2018年8月1日まで、約5週間の日程で、アメリカ国務省主催の「Study of the U.S. Institute for Student Leaders on Global Environmental Issues (SUSIプログラム)」に参加した。このプログラムは、アメリカ国務省がブラジル、ロシア、インド、中国、日本の大学生を対象に行っている夏季集中セミナーで、本年度はモンタナ州ミズーラにあるモンタナ大学で開催された。

日本の定員は4名であったが、それまで取り組んできた経験や英語で作成したエッセイが評価されたことで選考を通過し、参加資格を得ることができた。

このプログラムでは、環境問題に関する講義や議論、プレゼンテーションを行った。また、環境に力を入れている企業やNGOを訪問し、直接職員の環境に対する思いを聞く機会があった。このプログラムを通して、意識の高い参加者と生活をし、議論を重ねることで多角的に環境問題について分析することができるようになった。

また、経済や国際関係といった環境とは直接関係のないニュースを目にしても、「環境」というフィルターを通して物事を考える習慣が付いた。



訪問したNGO団体「Oceana」



訪問したリサイクルセンター



中国の大気汚染問題について議論



日本チームで日本国内の環境問題を発表

7. 将来の夢に向けて

私にとって生物環境システム学科の海外研修であるカナダ留学は、様々なプログラムに挑戦するきっかけとなった。しかし、周りの大多数の学生は、留学の経験を次に活かすことができているように感じられる。留学中に得たモチベーションや英語力を十分に生かすためにも、留学前に帰国後の計画を立てておき、帰国後すぐ挑戦・実行することを推奨したい。

私は、数々の国際的なプログラムにおける様々な人との出会いや学びを通し、自分の考え方の幅が広がり、大学という狭い世界ではなく、多種多様な価値観を持って、客観的に自分を評価できるようになった。さらに、海外での挑戦を通して、努力は認められていくことを実感したと同時に、将来に対する夢が自分の中で確固たるものとなった。私はこれからも挑戦し続け、将来、発展途上国の農家に向けて持続的農業の普及活動を行い、彼らが安定した生活を過ごせるよう貢献していきたい。

これらの功績が評価され、2018年度玉川大学・玉川学園学友会賞を受賞することができた。これまで支えて下さった方々にこの場を借りて御礼申し上げます。これからも挑戦する大切さを忘れず、更なる精進を重ねたい。

最後に

生物環境システム学科を特徴づける教育カリキュラムの一つに海外プログラムが置かれ、それは2017年度の学部改組後に設置された「環境農学科」へも踏襲されている。学科に所属する学生は、カナダあるいはオーストラリアの提携大学のいずれかで約4か月間にわたり英語

による授業を受講する。その間、学生寮への滞在ではなくホームステイを採用していることから、日常も含めた24時間英語づきの生活を送る仕組みとなっている。海外プログラムが開始された当初から、13年間もの年月が流れたが、参加学生は、外国人と積極的にコミュニケーションをとれるようになり、活動の場が海外にも開けていることを実感し、関心を日本の外で起きていることへも向けるようになる。英語の修得自体を主目的とするのであれば、4か月は十分な長さとは言えないが、国際社会で貢献する上での英語の重要性や活躍の場を世界に広げるために語学力がいかに大切かを実体験し、主体的な学びのアクセラレーションになることに意味があるのではないかと考えている。帰国後に、積極的に学修課題に取り組み、意欲的に質問し、問いかけに応え、双方向性のコミュニケーションを取り、学びを深めるようになる、という効果を引き出す上で4か月間という期間は機能していると評価している。主体性を持った学修がいかに大切なことか気づいてもらえる学修環境の提供は、これからの高等教育には必要ではないかと考えている。

眞木は、海外プログラムに注目して生物環境システム学科に入学し、2年次にカナダに留学し、この経験を端緒として、その後5つの海外プログラムにも参加することになった。6番目のSUSIプログラムは、レベルの高い厳しい選考過程を経て日本代表の一人となったという点で、素晴らしい功績と評価して頂いている。これからも、この海外プログラムが、学生の国際社会への関心を引き出すことに機能し、多くの後輩たちが育っていくことを期待したい。